

卓球部通信 「照一隅」 No.210

しょういちぐう

日本工業大学
駒場高等学校卓球部
発行責任者：平 雅行
平成26年12月2日発行

<http://www.nit-komaba.ed.jp/2/pinpon/210.pdf>

・東京都新人大会 シングルス・学校対抗 の結果

8 回戦進出（東京都ベスト3 2）中村 慎之介（21）

7 回戦進出（東京都ベスト6 4）八木 岳琉（2P）、6 回戦進出 2名

学校対抗の部 ベスト1 6（5 回戦敗退） 明大中野に惜しくも敗れる

平成26年度東京都新人大会シングルの部が10月25日（土）、26日（日）、11月3日（祝）、8日（土）の4日間、多摩工業高校、白鷗高校、明大明治高校の3会場で行われました。日駒からは18名が出場、そのうち13名が初戦を突破しました。シード選手は中村のみでしたが、中村は3回戦から6回戦までを順調に勝ち、7回戦に進出。八木は2回戦から5回戦まで、途中、危ない試合もありましたが、しっかりと勝ち6回戦進出。6回戦ではシード選手に対して3対0のストレートで勝ち、7回戦に進出、東京都ベスト6 4に入り決勝大会進出を決めました。また、6回戦には2名（岩切（2P）、大塚（1O））が進出しました。決勝大会は11月9日（日）、明大明治高校で行われました。7回戦の八木の相手は安田学園の選手でした。良いラリーもあり、1セットを奪いましたが1-3で敗れてしまいました。中村の相手は早大学院の選手でしたが、3-0のストレートで勝ち、自身初のベスト3 2進出を決めました。本校の選手でベスト3 2に入ったのは、昨年の新人大会での奥田大、昨年のインターハイ予選での大高、10年前の前田（4大会連続

3 2）、12年前の柳生（13年前の新人戦は16で東神大会出場）以来5人目のことです。そして学校対抗の部は、11月22日（土）、都立白鷗高校で行われました。朝9時に集合して準備をする予定でしたが、9時前にはほとんど準備が終わり、白鷗高校の先生も感心していました。一人一人が何をすれば良いのかを考えて行動し、効率よく準備が出来たと思います。試合の方ですが、初戦（2回戦）の成城との試合では3対1、3回戦の東京との試合は3対0のストレートで勝利し、11大会連続で東京都ベスト3 2に進出しました。4回戦の相手は関東第一です。私が顧問になってから初めての対戦ですが、かつては関東大会に22回も出場経験のある古豪です。相手のエースはシングルスでもベスト6 4に残っており、気の抜けない相手です。トップの岩切が3-0、2番の中村は相手のエースに対して3-1、3番ダブルスの岩切・八木組が3-2で勝利し、3対0で関東第一に勝ち、6大会連続で東京都ベスト1 6に進出しました。続く5回戦の相手は強豪の明大中野。1番の岩切が0-2から2-2に追いついたが、惜しくも2

-3。2番の八木が1-3、4番の須山が0-3、5番の中村は3-0で勝利したものの、惜しくも1対3で明大中野に敗れてしまいました。しかし、この新人大会では今までよりも一歩成長した姿が見えました。試合に向かう準備や姿勢、そして応援などチーム一丸となって戦うことができたと思います。また、保護者の方が6名も応援に来てくれました。ありがとうございました。あと少しのところまで来ましたがこの「あと少し」を埋めることが大変です。今まで以上にひとつひとつの行動や練習にしっかりと意識を高めて取り組み、一緒に目指しましょう。来年6月には東京都八王子市（エスフォルタアリーナ八王子）で第67回関東高等学校卓球大会が開催されます。地元開催ですので、学校対抗7校、ダブルス7組、シングルス14名が東京都代表です。東京都代表を目指して、この冬、しっかりと練習しよう。

・「あの負けがあつてこそ」（ロサンゼルス五輪ハンドボールアジア予選 蒲生 晴明さん）より

・・・日本ハンドボール史の転換期に位置するロサンゼルス五輪。その出場権を駆けた1983年のアジア予選は、韓国、台湾、中国、日本の4カ国2回戦総当たりのリーグ戦で争われた。

それまで日本は1972年ミュンヘン五輪以来、アジアの代表としての地位を確立してきたが、前年のアジア大会では中国に、同年のアジア選手権では韓国に敗れ、アジアの盟主としての座に陰りが見え始めていた時期である。

「モスクワ五輪に出られなかったメンバーが主力なので、当時の全日本はベテランばかりでした。夢をもう一度と最後のオリンピックに駆ける思いはみんな強かった」

蒲生は全日本の主力としてモントリオール五輪（76年）に出場し、続くモスクワ五輪の出場権も勝ち得ていた。しかし、当時の東西冷戦下における政治的背景により、同大会は国策としてボイコット。幾多のアスリートと共に涙を飲んだ不幸を経験している。

すでに体力のピークは過ぎていたが、蒲生はロス五輪終了後に引退するつもりだったため「これが最後の大舞台だ」とモチベーションは高まっていた。

だが、翌週に初戦を控えたある夜、予期せぬアクシデントに見舞われた。練習後、全日本のメンバーと食事に向かう途中、交差点を渡りかけた蒲生に脇見運転の車が突っ込んで来たのである。その直後、撥ねられ、一回転して地面に叩きつけられた。巻き込まれたのは蒲生一人だけだった。・・・

このような中で迎えたアジア予選第1ラウンド。初戦の台湾は順当に下したものの、若き韓国には圧倒され、20-24で全日本は敗北を喫した。

蒲生の性格に「弱気」はないが、身体が

ついてこないことに戸惑っていた。常ならば果敢に得点を狙うところが、チャンスメーカーになろうとする自分に納得ができず「俺はもっとやれるはずだ」「俺がやらなきゃいけないんだ」と試合中に何度も自信を鼓舞したが、気持ちと身体のコントロールを失ったまま試合を終えたのである。

その夜・・・選手間のミーティングの席上、「なんだ今日のザマは」「いつもの蒲生さんじゃない。俺たちを（日本リーグで）倒している人はどこへ行ったんだ」と佐々木信男、洞ヶ瀬直幸ら控え選手たちほうこうの咆哮がミーティングルームに響いた。その日、出場したメンバーを激しく突き上げたのである。

この言葉をキッカケに、「俺たちは何をやってたんだ」「俺たちの力はこんなもんじゃないはずだ」と全日本のメンバー全員が熱くなった。もちろん蒲生が燃えないはずはない。「よしやってやる」と思った時には交通事故のことなど忘れていた。

「言い出したのが一人じゃないから大変な勢いがありました。彼らはボクが怪我していることも知っています。でもあれは出ていないメンバーの怒りでした。こんなだったら俺の方がいいって気持ちですよ。普段は仲が良くって、そんなこと口にするような者たちではないんです。それがあんなに激しく食ってかかってくるのですから、我々の不甲斐なさが許せなかったのでしょう。ハッとさせられました。・・・

栄光に彩られた競技人生。試合に出ることが当たり前になっているうちに大切な事を見失っていた。蒲生はまるで頭を殴られたような衝撃を受けた。控え選手らの心の叫びは、蒲生の心の油断を突くものだった。彼らの声は全日本ハンドボールチームに携

わる全ての人々の願いであり、祈りであったはずだ。

胸に突き刺さった彼らの声が、その思いが“力”に変わった。蒲生から雑念が消え、大黒柱の不動の心は揺るぎない結果の基となった。さらに、ロス五輪への望み薄か！？という内容の新聞記事が、追い込まれたチームを厚くさせたのである。蒲生に問答無用の激しさが戻った。こうして全日本は敗戦から一転、思いを一つに反論に出た。

韓国戦の悔しさも、予期せぬ交通事故も、控え選手たちの心の叫びも、全てはロス五輪への爆発的なモチベーションへと繋がっていった。

迎えた第2ラウンド。覚醒した全日本は全勝の韓国と25-19で撃破。最終戦の中国には会場内にカウントダウンの声が響く中、劇的な勝利を収めた

全日本は1敗同士で並んでいた韓国を得失点差で上回り、ロス五輪へのキップを手に入れたのである。

「天の時」「地の利」「人の和」この三つが合致したからこそ、勝ちに結びついたと当時の監督・市原則之が手記に収めている。その意味を蒲生はこう語る。

「天の時は2回戦総当たりというルールです。あれが1回戦だったら勝者は韓国になっていました。地の利は日本で開催されたこと。人の和は控え選手の心の叫びによって強い結束力が生まれたことです」

チームは花形選手ばかりでは成り立たない。控えの選手、データを取る役割、スケジュールを管理する者、ユニフォームを用意する担当など、人にはそれぞれに役割があって、その全てが結束してこそチームなのである。一人として無駄はない。・・・

と書いてあります。蒲生さんは中央大学卒業後、77年に大同特殊鋼に入社。日本リーグでは6年連続で得点王に輝きました。モントリオール、モスクワ、ロサンゼルス五輪の代表選手でもありました。「世界のガモー」として日本にハンド界を支えてきた人で、引退後は日本代表監督になり、現在は中部大学教授・ハンドボール部監督を務めています。「天の時」「地の利」「人の和」、とても大切です。また、「人には役割があって・・・」と描いてありますが、全ての部員が結束して団体戦を戦います。全員の方で東京都代表を勝ち取るう！！